

## CHAPTER 28

### 魔法省令

ドローレス ジェーン アンブリッジ（高等尋問官）はアルバス ダンブルドアに代わり  
hogwarts魔法魔術学校の校長に就任した。

以上は教育令第二十八号に順うものである。

魔法大臣 コーネリウス オズワルド ファッジ

一夜にして、この知らせが学校中に掲示された。しかし、城中の誰もが知っている話が、どのように広まったのかは、この掲示では説明できなかった。ダンブルドアが逃亡するとき、闇衤いを二人、高等尋問官、魔法大臣、さらにその下級補佐官をやっつけたという話だ。

ハリーの行く先々で、城中がダンブルドアの逃亡の噂でもちきりだった。

話が広まるにつれて、たしかに細かいところでは尾鰭がついていたが（二年生の女子が、同級生に、ファッジは頭がかぼちゃんになって、現在聖マンガに入院していると、真しやかに話しているのが、ハリーの耳に入ってきた）、それ以外は驚くほど正確な情報が伝わっていた。

たとえば、ダンブルドアの校長室で現場を目撃した生徒が、ハリーとマリエッタだけだったということはみんなが知っていた。

マリエッタはいま医務室にるので、ハリーはみんなに取り囲まれ、直体験の話をせがまれる羽目になった。

「ダンブルドアはすぐに戻ってくるさ」

「薬草学」からの帰り道、ハリーの話熱心に聞いたあとで、アーニー マクミランが自信たっぷりに言った。

「僕たちが二年生のときも、あいつら、ダンブルドアを長くは遠ざけておけなかったし、今度だってきっとそうさ。『太った修道士』が話してくれたんだけどー」

アーニーが密談をするように声を落としたので、ハリー、ロン、ハーマイオニーは、アー

## Chapter 28

### Snape's Worst Memory

— BY ORDER OF —

The Ministry of Magic

Dolores Jane Umbridge (High Inquisitor) has replaced Albus Dumbledore as Head of Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry.

*The above is in accordance with*

*Educational Decree Number Twenty-eight.*

Signed:

Cornelius Oswald Fudge

MINISTER OF MAGIC

The notices had gone up all over the school overnight, but they did not explain how every single person within the castle seemed to know that Dumbledore had overcome two Aurors, the High Inquisitor, the Minister of Magic, and his Junior Assistant to escape. No matter where Harry went within the castle next day, the sole topic of conversation was Dumbledore's flight, and though some of the details might have gone awry in the retelling (Harry overheard one second-year girl assuring another that Fudge was now lying in St. Mungo's with a pumpkin for a head), it was surprising how accurate the rest of their information was. Everybody seemed aware, for instance, that Harry and Marietta were the only students to have witnessed the scene in Dumbledore's office, and as Marietta was now in the hospital wing, Harry found himself besieged with requests to give a firsthand account wherever he went.

ニーのほうに顔を近づけて聞いた。  
「――アンブリッジが昨日の夜、城内や校庭でダンブルドアを探したあと、校長室に戻ろうとしたらしいんだ。ガーゴイルのところを通れなかったってさ。校長室は、独りでに封鎖して、アンブリッジを締め出したんだ」  
アーニーがにやりと笑った。

「どうやら、あいつ、相当癪癪を起こしたらしい」

「ああ、あの人、きっと校長室に座る自分の姿を見てみたくてしょうがなかったんだわ」  
玄関ホールに続く石段を上がりながら、ハーマイオニーがきつい言い方をした。

「ほかの先生より自分が偉いんだぞって。バカな思い上がりの、権力に取っつかれたばばあのー」

「おーや君、本気で最後まで言うつもりかい？ グレンジャー？」

ドラコ マルフォイが、クラブとゴイルを従え、扉の陰からするりと現れた。

青白い顎の尖った顔が、悪意で輝いている。

「気の毒だが、グリフィンボールとハッフルパフから少し減点しないといけないねえ」

マルフォイが気取って言った。

「監督生同士は減点できないぞ、マルフォイ」  
アーニーが即座に言った。

「監督生ならお互いに減点できないのは知ってるよ」  
マルフォイがせせら笑った。クラブとゴイルも嘲り笑った。

「しかし、『尋問官親衛隊』なら――」

「いま何て言った？」  
ハーマイオニーが鋭く聞いた。

「尋問官親衛隊だよ、グレンジャー」

マルフォイは、胸の監督生バッジのすぐ下に留めた、「I」の字形の小さな銀バッジを指差した。

「魔法省を支持する、少数の選ばれた学生のグループでね。アンブリッジ先生直々の選り抜きだよ。とにかく、尋問官親衛隊は、減点する力を持っているんだ……そこでグレンジャー、新しい校長に対する無礼な態度で五点減点。マクミラン、僕に逆らったから五点。ポッター、おまえが気に食わないから五点。ウィーズリー、シャツがはみ出しているから、もう五点減点。ああ、そうだ。忘れてい

“Dumbledore will be back before long,” said Ernie Macmillan confidently on the way back from Herbology after listening intently to Harry’s story. “They couldn’t keep him away in our second year and they won’t be able to this time. The Fat Friar told me …” He dropped his voice conspiratorially, so that Harry, Ron, and Hermione had to lean closer to him to hear, “... that Umbridge tried to get back into his office last night after they’d searched the castle and grounds for him. Couldn’t get past the gargoyle. The Head’s office has sealed itself against her.” Ernie smirked. “Apparently she had a right little tantrum. ...”

“Oh, I expect she really fancied herself sitting up there in the Head’s office,” said Hermione viciously, as they walked up the stone steps into the entrance hall. “Lording it over all the other teachers, the stupid puffed-up, power-crazy old —”

“Now, do you *really* want to finish that sentence, Granger?”

Draco Malfoy had slid out from behind the door, followed by Crabbe and Goyle. His pale, pointed face was alight with malice.

“Afraid I’m going to have to dock a few points from Gryffindor and Hufflepuff,” he drawled.

“It’s only teachers that can dock points from Houses, Malfoy,” said Ernie at once.

“Yeah, we’re prefects too, remember?” snarled Ron.

“I know *prefects* can’t dock points, Weasel King,” sneered Malfoy; Crabbe and Goyle sniggered. “But members of the Inquisitorial Squad —”

“The *what*?” said Hermione sharply.

“The Inquisitorial Squad, Granger,” said

た。おまえは穢れた血だ、グレンジャー。  
だから十点減点」  
ロンが杖を抜いた。  
ハーマイオニーが押し戻し、「だめよ」と囁いた。  
「賢明だな、グレンジャー」マルフォイが囁くように言った。  
「新しい校長、新しい時代だ……いい子にするんだぞ、ポッティ……ウィーズル王者……」  
思いっきり笑いながら、マルフォイはクラブとゴイルを率いて意気揚々と去っていった。  
「ただの脅しさ」  
アーニーが愕然とした顔で言った。「あいつが点を引くなんて、許されるはずがない……そんなこと、バカげてるよ……監督生制度が完全に覆されちゃうじゃないか」  
しかし、ハリー、ロン、ハーマイオニーは、背後の壁の窪みに設置されている、寮の点数を記録した巨大な砂時計のほうに、自然に目が行った。  
今朝までは、グリフィンドールとレイブンクローが接戦で一位を争っていた。  
いまは見る間に石が飛び上がって上に戻り、下に溜まった量が減っていった。  
事実、まったく変わらないのは、エメラルドが詰まったスリザリンの時計だけだった。  
「気がついたか？」フレッドの声がした。  
ジョージと二人で大理石の階段を下りてきたところで、ハリー、ロン、ハーマイオニー、アーニーと砂時計の前で一緒になった。  
「マルフォイが、いま僕たちからほとんど五十点も減点したんだ」グリフィンドールの砂時計から、また石が数個上に戻るのを見ながら、ハリーが憤慨した。  
「うん。モンタギューのやつ、休み時間に、俺たちからも減点しようとしやがった」  
ジョージが言った。  
「『しようとした』って、どういうこと？」  
ロンが素早く聞いた。  
「最後まで言い終らなかったのさ」フレッドが言った。  
「俺たちが、二階の『姿をくرامす飾り棚』に頭から突っ込んでやったんでね」

Malfoy, pointing toward a tiny silver I upon his robes just beneath his prefect's badge. "A select group of students who are supportive of the Ministry of Magic, hand-picked by Professor Umbridge. Anyway, members of the Inquisitorial Squad *do* have the power to dock points. ... So, Granger, I'll have five from you for being rude about our new headmistress. ... Macmillan, five for contradicting me. ... Five because I don't like you, Potter ... Weasley, your shirt's untucked, so I'll have another five for that. ... Oh yeah, I forgot, you're a Mudblood, Granger, so ten for that. ..."

Ron pulled out his wand, but Hermione pushed it away, whispering, "Don't!"

"Wise move, Granger," breathed Malfoy. "New Head, new times ... Be good now, Potty ... Weasel King ..."

He strode away, laughing heartily with Crabbe and Goyle.

"He was bluffing," said Ernie, looking appalled. "He can't be allowed to dock points ... that would be ridiculous. ... It would completely undermine the prefect system. ..."

But Harry, Ron, and Hermione had turned automatically toward the giant hourglasses set in niches along the wall behind them, which recorded the House points. Gryffindor and Ravenclaw had been neck and neck in the lead that morning. Even as they watched, stones flew upward, reducing the amounts in the lower bulbs. In fact, the only glass that seemed unchanged was the emerald-filled one of Slytherin.

"Noticed, have you?" said Fred's voice.

He and George had just come down the marble staircase and joined Harry, Ron, Hermione, and Ernie in front of the hourglasses.

ハーマイオニーがショックを受けた顔をした。

「そんな、あなたたち、とんでもないことになるわ！」

「モンタギューが現れるまでは大丈夫さ。それまで数週間かかるかもな。やつをどこに送っちゃったのかわかんねえし」フレッドがさばさばと言った。

「とにかくだ……俺たちは、問題に巻き込まれることなどもう気にしない、と決めた」

「気にしたことあるの？」ハーマイオニーが聞いた。

「そりゃ、あるさ」ジョージが答えた。

「一度も退学になってないだろ？」

「俺たちは、常に一線を守った」フレッドが言った。

「ときには、爪先ぐらいい線を超えたかもしれないが」ジョージが言った。

「だけど、常に、本当の大混乱を起こす手前で踏み止まったのだ」フレッドが言った。

「だけど、いまは？」ロンが恐る恐る聞いた。

「そう、いまは——」ジョージが言った。

「——ダンブルドアもいなくなったし——」フレッドが言った。

「——ちょっとした大混乱こそ——」ジョージが言った。

「——まさに、親愛なる新校長にふさわしい」フレッドが言った。

「ダメよ！」ハーマイオニーが囁くように言った。

「ほんとに、ダメ！あの人、あなたたちを追いつ出す口実なら大喜びだよ」

「わかってないなあ、ハーマイオニー」フレッドがハーマイオニーに笑いかけた。

「俺たちはもう、ここにいられるかどうかなんて気にしないんだ。いますぐにでも出ていきたいところだけど、ダンブルドアのためにまず俺たちの役目を果たす決意なんでね。そこで、とにかく」

フレッドが腕時計を確かめた。

「第一幕がまもなく始まる。悪いことは言わないから、昼食を食べに大広間に入ったほうがいいぜ。そうすりゃ、先生方も、おまえたちは無関係だとわかるからな」

“Malfoy just docked us all about fifty points,” said Harry furiously, as they watched several more stones fly upward from the Gryffindor hourglass.

“Yeah, Montague tried to do us during break,” said George.

“What do you mean, ‘tried’?” said Ron quickly.

“He never managed to get all the words out,” said Fred, “due to the fact that we forced him headfirst into that Vanishing Cabinet on the first floor.”

Hermione looked very shocked.

“But you’ll get into terrible trouble!”

“Not until Montague reappears, and that could take weeks, I dunno where we sent him,” said Fred coolly. “Anyway ... we’ve decided we don’t care about getting into trouble anymore.”

“Have you ever?” asked Hermione.

“ ‘Course we have,” said George. “Never been expelled, have we?”

“We’ve always known where to draw the line,” said Fred.

“We might have put a toe across it occasionally,” said George.

“But we’ve always stopped short of causing real mayhem,” said Fred.

“But now?” said Ron tentatively.

“Well, now —” said George.

“— what with Dumbledore gone —” said Fred.

“— we reckon a bit of mayhem —” said George.

“— is exactly what our dear new Head

「何に無関係なの？」ハーマイオニーが心配そうに聞いた。

「いまにわかる」ジョージが言った。

「さ、早く行けよ」

フレッドとジョージはみんなに背を向け、昼食を食べに階段を下りてくる人混みが膨れ上がってくる中へと姿を消した。

困惑しきった顔のアーニーは、「変身術」の宿題がすんでいないとかなんとか呟きながら慌てていなくなった。「ねえ、やっぱりここにはいないほうがいいわ」ハーマイオニーが神経質に言った。

「万が一……」

「うん、そうだ」ロンが言った。そして、三人は、大広間の扉に向かった。

しかし、その日の大広間の天井を、白い雲が飛ぶように流れていくのをちらりと見たとたん、誰かがハリーの肩を叩いた。

振り向くと、管理人のフィルチが、目と鼻の先にいた。

ハリーは急いで二、三步下がった。

フィルチの顔は遠くから見るにかざる。

「ポッター、校長がおまえに会いたいとおっしゃる」フィルチが意地の悪い目つきをした。

「僕がやったんじゃない」

ハリーは、バカなことを口走った。

フレッドとジョージが何やら企んでいることを考えていたのだ。

フィルチは声を出さずに笑い、顎がわなわな震えた。

「後ろめたいんだな、え？」フィルチがゼイゼイ声で言った。

「ついて来い」

ハリーはロンとハーマイオニーをちらりと振り返った。

二人とも心配そうな顔だ。

ハリーは肩をすくめ、フィルチに従って玄関ホールに戻り、腹べこの生徒たちの波に逆らって歩いた。

フィルチはどうやら上機嫌で、大理石の階段を上りながら、軋むような声で、そっと鼻歌を歌っていた。最初の踊り場で、フィルチが言った。

「ポッター、状況が変わってきた」

deserves,” said Fred.

“You mustn’t!” whispered Hermione. “You really mustn’t! She’d love a reason to expel you!”

“You don’t get it, Hermione, do you?” said Fred, smiling at her. “We don’t care about staying anymore. We’d walk out right now if we weren’t determined to do our bit for Dumbledore first. So anyway,” he checked his watch, “phase one is about to begin. I’d get in the Great Hall for lunch if I were you, that way the teachers will see you can’t have had anything to do with it.”

“Anything to do with what?” said Hermione anxiously.

“You’ll see,” said George. “Run along, now.”

Fred and George turned away and disappeared in the swelling crowd descending the stairs toward lunch. Looking highly disconcerted, Ernie muttered something about unfinished Transfiguration homework and scurried away.

“I think we *should* get out of here, you know,” said Hermione nervously. “Just in case …”

“Yeah, all right,” said Ron, and the three of them moved toward the doors to the Great Hall, but Harry had barely glimpsed today’s ceiling of scudding white clouds when somebody tapped him on the shoulder and, turning, he found himself almost nose to nose with Filch, the caretaker. He took several hasty steps backward; Filch was best viewed at a distance.

“The headmistress would like to see you, Potter,” he leered.

“I didn’t do it,” said Harry stupidly, thinking of whatever Fred and George were

「気がついてるよ」ハリーが冷たく言った。  
「そーだ……ダンブルドア校長は、おまえたちに甘すぎると、わたしはもう何年もそう言い続けてきた」

フィルチがクックッといやな笑い方をした。  
「わたしが鞭で皮が剥けるほど打ちのめすことができるかわかっていたら、小汚い小童のおまえたちだって、『臭い玉』を落としたりはしなかっただろうが？ 踵を縛り上げられてわたしの部屋の天井から逆さ吊りにされるなら、廊下で『噛みつきフリスビー』を投げようなどと思う童は一人もいなかっただろうが？ しかし、教育令第二十九号が出るとな、ポッター、わたしにはそういうことが許されるんだ……その上、あの方は大臣に、ピープズ追放令に署名するよう頼んでくださった… …ああ……あの方が取り仕切れば、ここも様変わりするだろう……」

フィルチを味方につけるため、アンブリッジが相当な手を打ったのは確かだ、とハリーは思った。

最悪なのは、フィルチが重要な武器になりうるということだ。

学校の秘密の通路や隠れ場所に関してのフィルチの知識たるや、それを凌ぐのは、恐らくウィーズリーの双子だけだ。

「さあ着いたぞ」

フィルチは意地の悪い目でハリーを見ながら、アンブリッジ先年の部屋のドアを三度ノックし、ドアを開けた。

「ポッターめを連れて参りました。先生」  
罰則で何度も来た、お馴染みのアンブリッジの部屋は、以前と変わっていなかった。  
一つだけ違ったのは、木製の大きな角材が机の前方に横長に置かれていることで、金文字で校長と書いてある。

さらに、ハリーのファイアボルトと、フレッドとジョージの二本のクリーンスweepがーハリーは胸が痛んだー机の後ろの壁に打ち込まれたがっしりとした鉄の杭に、鎖で繋がれて南京錠を掛けられていた。

アンブリッジは机に向かい、ピンクの羊皮紙に、何やら忙しげに走り書きしていたが、二人が入っていくと、目を上げ、ニターッと微笑んだ。

planning. Filch's jowls wobbled with silent laughter.

“Guilty conscience, eh?” he wheezed. “Follow me. ...”

Harry glanced back at Ron and Hermione, who were both looking worried. He shrugged and followed Filch back into the entrance hall, against the tide of hungry students.

Filch seemed to be in an extremely good mood; he hummed creakily under his breath as they climbed the marble staircase. As they reached the first landing he said, “Things are changing around here, Potter.”

“I’ve noticed,” said Harry coldly.

“Yerse ... I’ve been telling Dumbledore for years and years he’s too soft with you all,” said Filch, chuckling nastily. “You filthy little beasts would never have dropped Stinkpellets if you’d known I had it in my power to whip you raw, would you, now? Nobody would have thought of throwing Fanged Frisbees down the corridors if I could’ve strung you up by the ankles in my office, would they? But when Educational Decree Twenty-nine comes in, Potter, I’ll be allowed to do them things. ... And she’s asked the Minister to sign an order for the expulsion of Peeves. ... Oh, things are going to be very different around here with *her* in charge. ...”

Umbridge had obviously gone to some lengths to get Filch on her side, Harry thought, and the worst of it was that he would probably prove an important weapon; his knowledge of the school’s secret passageways and hiding places was probably second only to the Weasley twins.

“Here we are,” he said, leering down at Harry as he rapped three times upon Professor Umbridge’s door and pushed it open. “The

「ごくろうさま、アーガス」  
「とんでもない、先生、おやすい御用で」フィルチはリューマチの体が耐えられる限度まで深々とお辞儀し、後退りで部屋を出ていった。  
アンブリッジがやさしく言った。  
「座りなさい」アンブリッジは椅子を指差してぶっきらぼうに言った。  
ハリーが腰掛けた。  
アンブリッジはそれからまたしばらく書き物を続けた。  
ハリーはアンブリッジの頭越しに、憎らしい子猫が皿の周りを跳ね回っている絵を眺めながら、いったいどんな恐ろしいことが新たにハリーを待ち受けているのだろうと考えていた。  
「さてと」  
やっと羽根ペンを置き、アンブリッジは、ことさらにうまそうな蠅を飲み込もうとするガマガエルのような顔をした。  
「何か飲みますか？」  
「えっ？」ハリーは聞き違いだと思った。  
「飲み物よ、ミスター ポッター」アンブリッジは、ますますニターッと笑った。  
「紅茶？ コーヒー？ かぼちゃジュース？」  
飲み物の名前を言うたびに、アンブリッジは短い杖を振り、机の上に茶碗やグラスに入った飲み物が現れた。  
「何もいりません。ありがとうございます」ハリーが言った。  
「一緒に飲んでほしいの」アンブリッジの声が危険な甘ったるさに変わった。  
「どれか選びなさい」  
「それじゃ……紅茶を」ハリーは肩をすくめながら言った。  
アンブリッジは立ち上がってハリーに背中を向け、大げさな身振りで紅茶にミルクを入れた。  
それから、不吉に甘い微笑を湛え、カップを持ってせかせかと机を回り込んでやって来た。  
「どうぞ」と紅茶をハリーに渡した。  
「冷めないうちに飲んでね。さーてと、ミスター ポッター……昨夜の残念な事件のあとですから、ちょっとおしゃべりをしたらどう

Potter boy to see you, ma'am.”

Umbridge's office, so very familiar to Harry from his many detentions, was the same as usual except for the large wooden block lying across the front of her desk on which golden letters spelled the word HEADMISTRESS; also his Firebolt, and Fred's and George's Clean-sweeps, which he saw with a pang were now chained and padlocked to a stout iron peg in the wall behind the desk. Umbridge was sitting behind the desk, busily scribbling upon some of her pink parchment, but looked up and smiled widely at their entrance.

“Thank you, Argus,” she said sweetly.

“Not at all, ma'am, not at all,” said Filch, bowing as low as his rheumatism would permit, and exiting backward.

“Sit,” said Umbridge curtly, pointing toward a chair, and Harry sat. She continued to scribble for a few moments. He watched some of the foul kittens gamboling around the plates over her head, wondering what fresh horror she had in store for him.

“Well now,” she said finally, setting down her quill and looking like a toad about to swallow a particularly juicy fly. “What would you like to drink?”

“What?” said Harry, quite sure he had misheard her.

“To drink, Mr. Potter,” she said, smiling still more widely. “Tea? Coffee? Pumpkin juice?”

As she named each drink, she gave her short wand a wave, and a cup or glass of it appeared upon her desk.

“Nothing, thank you,” said Harry.

“I wish you to have a drink with me,” she said, her voice becoming more dangerously

かと思ったのよ」  
ハリーは黙っていた。  
アンブリッジは自分の椅子に戻り、答えを待った。沈黙の数分が長く感じられた。  
やがてアンブリッジが陽気に言った。  
「飲んでないじゃないの！」  
ハリーは急いでカップを口元に持っていったが、また急に下ろした。  
アンブリッジの背後にある、趣味の悪い絵に描かれた子猫の一匹が、マッドアイムーディの魔法の目と同じ丸い大きな青い目をしていたので、敵とわかっている相手に勧められた飲み物をハリーが飲んだと聞いたら、マッドアイが何と言うだろうと思ったのだ。  
「どうかした？」アンブリッジはまだハリーを見ていた。  
「お砂糖がほしいの？」  
「いいえ」ハリーが答えた。  
ハリーはもう一度口元までカップを持っていき、一口飲むふりをしたが、唇を固く結んだままだった。  
アンブリッジの口がますます横に広がった。  
「そうそう」アンブリッジが囁くように言った。  
「それでいいわ。さて、それじゃ……」  
アンブリッジが少し身を乗り出した。  
「アルバス ダンブルドアはどこなの？」  
「知りません」ハリーが即座に答えた。  
「さあ、飲んで、飲んで」アンブリッジはニターッと微笑んだままだ。  
「さあ、ミスター ポッター、子どもだましのゲームはやめましょうね。ダンブルドアがどこに行ったのか、あなたが知っていることはわかっているのよ。あなたとダンブルドアは、初めから一緒にこれを企んでいたんだから。自分の立場を考えなさい。ミスター ポッター……」  
「どこにいるか、僕、知りません」ハリーはもう一度飲むふりをした。  
「結構」アンブリッジは不機嫌な顔をした。  
「それなら、教えていただきますでしょうか。シリウス ブラックの居場所を」  
ハリーの胃袋が引っくり返り、カップを持つ手が震えて、受け皿がカタカタ鳴った。  
唇を閉じたまま、口元でカップを傾けたの

sweet. “Choose one.”

“Fine ... tea then,” said Harry, shrugging.

She got up and made quite a performance of adding milk with her back to him. She then bustled around the desk with it, smiling in sinisterly sweet fashion.

“There,” she said, handing it to him. “Drink it before it gets cold, won’t you? Well, now, Mr. Potter ... I thought we ought to have a little chat, after the distressing events of last night.”

He said nothing. She settled herself back into her seat and waited. When several long moments had passed in silence, she said gaily, “You’re not drinking up!”

He raised the cup to his lips and then, just as suddenly, lowered it. One of the horrible painted kittens behind Umbridge had great round blue eyes just like Mad-Eye Moody’s magical one, and it had just occurred to Harry what Mad-Eye would say if he ever heard that Harry had drunk anything offered by a known enemy.

“What’s the matter?” said Umbridge, who was still watching him. “Do you want sugar?”

“No,” said Harry.

He raised the cup to his lips again and pretended to take a sip, though keeping his mouth tightly closed. Umbridge’s smile widened.

“Good,” she whispered. “Very good. Now then ...” She leaned forward a little. “Where is *Albus Dumbledore*?”

“No idea,” said Harry promptly.

“Drink up, drink up,” she said, still smiling. “Now, Mr. Potter, let us not play childish games. I know that you know where he has gone. You and *Dumbledore* have been in this



で、熱い液体が少しローブにこぼれた。  
「知りません」答え方が少し早目すぎた。  
「ミスター ポッター」アンブリッジが迫った。

「いいですか、十月に、グリフィンボールの暖炉で、犯罪者のブラックをいま一步で逮捕するところだったのは、ほかならぬわたくしですよ。ブラックが会っていたのはあなただと、わたくしにははっきりわかっています。わたくし証拠をつかんでさえいたら、はっきり言って、あなたもブラックも、いま、こうして自由の身ではいられなかったでしょう。もう一度聞きます。ミスター ポッター……シリウス ブラックはどこですか？」

「知りません」ハリーは大声で言った。  
「見当もつきません」二人はそれから長いこと睨み合っていた。

ハリーは目が潤んできたのを感じた。アンブリッジがやたら立ち上がった。

「いいでしょう、ポッター。今回は信じておきます。しかし、警告しておきますよ。わたしは魔法省が後ろ盾になっているのです。学校を出入りする通信網は全部監視されています。暖炉飛行ネットワークの監視人が、ホグワーツのすべての暖炉を見張っていますーわたくしの暖炉だけはもちろん例外ですが。

『尋問官親衛隊』が城を出入りするふくろう便を全部開封して読んでいます。それに、フィルチさんが城に続くすべての秘密の通路を見張っています。わたくしが証拠の欠けらでも見つけたら……」

ドーン！

部屋の床が揺れた。

アンブリッジが横滑りし、ショックを受けた顔で、机にしがみついて踏み止まった。

「いったいこれはー？」

アンブリッジがドアのほうを見つめていた。その際に、ハリーはほとんど減っていない紅茶を、一番近くのドライフラワーの花瓶に捨てた。数階下のほうから、走り回る音や悲鳴が聞こえた。

「昼食に戻りなさい、ポッター！」

アンブリッジは杖を上げ、部屋から飛び出していった。

ハリーはひと呼吸置いてから、大騒ぎの元は

together from the beginning. Consider your position, Mr. Potter. ...”

“I don’t know where he is.”

Harry pretended to drink again.

“Very well,” said Umbridge, looking displeased. “In that case, you will kindly tell me the whereabouts of Sirius Black.”

Harry’s stomach turned over and his hand holding the teacup shook so that the cup rattled in its saucer. He tilted the cup to his mouth with his lips pressed together, so that some of the hot liquid trickled down onto his robes.

“I don’t know,” he said a little too quickly.

“Mr. Potter,” said Umbridge, “let me remind you that it was I who almost caught the criminal Black in the Gryffindor fire in October. I know perfectly well it was you he was meeting and if I had had any proof neither of you would be at large today, I promise you. I repeat, Mr. Potter ... Where is Sirius Black?”

“No idea,” said Harry loudly. “Haven’t got a clue.”

They stared at each other so long that Harry felt his eyes watering. Then she stood up.

“Very well, Potter, I will take your word for it this time, but be warned: The might of the Ministry stands behind me. All channels of communication in and out of this school are being monitored. A Floo Network Regulator is keeping watch over every fire in Hogwarts — except my own, of course. My Inquisitorial Squad is opening and reading all owl post entering and leaving the castle. And Mr. Filch is observing all secret passages in and out of the castle. If I find a shred of evidence ...”

**BOOM!**

The very floor of the office shook; Umbridge slipped sideways, clutching her desk

何かを見ようと、急いで部屋を出た。  
騒ぎの原因は難なく見つかった。  
一階下は破裂した伏魔殿状態だった。  
誰かが（ハリーは誰なのかを敏感に見抜いていたが）、巨大な魔法の仕掛け花火のようなものを爆発させたいらしい。  
全身が緑と金色の火花でできたドラゴンが何匹も、階段を往ったり来たりしながら、火の粉を撒き散らし、パンパン大きな音を立てている。  
直径一五メートルもある、ショッキングピンクのネズミ花火が、空飛ぶ円盤群のようにビュンビュンと破壊的に飛び回っている。  
ロケット花火がキラキラ輝く銀色の星を長々と噴射しながら、壁に当たって跳ね返っている。  
線香花火は勝手に空中に文字を書いて悪態をついている。  
ハリーの目の届くかぎり至る所に、爆竹が地雷のように爆発している。  
普通なら燃え尽きたり、消えたり、動きを止めたりするはずなのに、この奇跡の仕掛け花火は、ハリーが見つめれば見つめるほどエネルギーを増すかのようなだった。  
フィルチとアンブリッジは、恐怖で身動きできないらしく、階段の途中に立ちすくんでいた。  
ハリーが見ている前で、大きめのネズミ花火が、もっと広い場所で動こうと決めたらしく、アンブリッジとフィルチに向かって、シュルシュルシュルシュルと不気味な音を立てながら回転してきた。  
二人とも恐怖の悲鳴をあげて身をかわした。  
するとネズミ花火はそのままずっと二人の背後の窓から飛び出し、校庭に出ていった。  
その間、ドラゴンが数匹と、不気味な煙を吐いていた大きな紫のコウモリが、廊下の突き当たりのドアが開いているのをいいことに、三階に抜け出した。  
「早く、フィルチ、早く！」アンブリッジが金切り声をあげた。  
「なんとかしないと、学校中に広がるわー『ステューピファイ！＜麻痺せよ＞』」  
アンブリッジの杖先から、赤い光が飛び出し、ロケット花火の一つに命中した。

for support, looking shocked.

“What was — ?”

She was gazing toward the door; Harry took the opportunity to empty his almost full cup of tea into the nearest vase of dried flowers. He could hear people running and screaming several floors below.

“Back to lunch with you, Potter!” cried Umbridge, raising her wand and dashing out of the office. Harry gave her a few seconds’ start then hurried after her to see what the source of all the uproar was.

It was not difficult to find. One floor down, pandemonium reigned. Somebody (and Harry had a very shrewd idea who) had set off what seemed to be an enormous crate of enchanted fireworks.

Dragons comprised entirely of green-and-gold sparks were soaring up and down the corridors, emitting loud fiery blasts and bangs as they went. Shocking-pink Catherine wheels five feet in diameter were whizzing lethally through the air like so many flying saucers. Rockets with long tails of brilliant silver stars were ricocheting off the walls. Sparklers were writing swearwords in midair of their own accord. Firecrackers were exploding like mines everywhere Harry looked, and instead of burning themselves out, fading from sight, or fizzling to a halt, these pyrotechnical miracles seemed to be gaining in energy and momentum the longer he watched.

Filch and Umbridge were standing, apparently transfixed with horror, halfway down the stairs. As Harry watched, one of the larger Catherine wheels seemed to decide that what it needed was more room to maneuver; it whirled toward Umbridge and Filch with a sinister wheeeeeeeeeee. Both adults yelled with fright and ducked and it soared straight out of

空中で固まるどころか、花火は大爆発し、野原の真ん中にあるセンチメンタルな顔の魔女の絵に穴を開けた。

魔女は間一髪で逃げ出し、数秒後に隣の絵にぎゅうぎゅう入り込んだ。

隣の絵でトランプをしていた魔法使いが二人、急いで立ち上がって魔女のために場所を空けた。

「失神させてはダメ、フィルチ！」アンブリッジが怒ったように叫んだ。

まるで、呪文を唱えたのは、何かなんでもフィルチだったかのような言い種だ。

「承知しました。校長先生！」フィルチがゼイゼイ声で言った。

フィルチはでき損ないのスクイプで、花火を「失神」させることなど、花火を飲み込むのと同じぐらい不可能な技だ。

フィルチは近くの倉庫に飛び込み、箒を引っ張り出し、空中の花火を叩き落しはじめたが、数秒後、箒の先が燃えだした。

ハリーは満喫して、笑いながら、頭を低くして駆けだした。

ちょっと先の廊下に掛かったタペストリーの裏に、隠れたドアがあることを知っていたのだ。

滑り込むと、そこにフレッドとジョージが隠れていた。

アンブリッジとフィルチが叫ぶのを聞きながら、声を押し殺し、体を震わせて笑いこけていた。

「すごいよ」ハリーはニヤッと笑いながら低い声で言った。

「ほんとにすごい……君たちのせいで、ドクター フィリバスターも商売上がったんだよ。間違いない……」

「ありがとう」ジョージが笑いすぎて流れた涙を拭きながら小声で言った。

「ああ、あいつが今度は『消失呪文』を使ってくれるといいんだけどな……そのたびに花火が十倍に増えるんだ」

花火は燃え続け、その午後学校中に広がった。

相当な被害を引き起こし、とくに爆竹がひどかったが、先生方はあまり気にしていないようだった。

the window behind them and off across the grounds. Meanwhile, several of the dragons and a large purple bat that was smoking ominously took advantage of the open door at the end of the corridor to escape toward the second floor.

“Hurry, Filch, hurry!” shrieked Umbridge. “They’ll be all over the school unless we do something — *Stupefy*!”

A jet of red light shot out of the end of her wand and hit one of the rockets. Instead of freezing in midair, it exploded with such force that it blasted a hole in a painting of a soppy-looking witch in the middle of a meadow — she ran for it just in time, reappearing seconds later squashed into the painting next door, where a couple of wizards playing cards stood up hastily to make room for her.

“Don’t Stun them, Filch!” shouted Umbridge angrily, for all the world as though it had been his suggestion.

“Right you are, Headmistress!” wheezed Filch, who was a Squib and could no more have Stunned the fireworks than swallowed them. He dashed to a nearby cupboard, pulled out a broom, and began swatting at the fireworks in midair; within seconds the head of the broom was ablaze.

Harry had seen enough. Laughing, he ducked down low, ran to a door he knew was concealed behind a tapestry a little way along the corridor and slipped through it to find Fred and George hiding just behind it, listening to Umbridge’s and Filch’s yells and quaking with suppressed mirth.

“Impressive,” Harry said quietly, grinning. “Very impressive ... You’ll put Dr. Filibuster out of business, no problem. ...”

“Cheers,” whispered George, wiping tears

「おや、まあ」マクゴナガル先生は、自分の教室の周りにドラゴンが一匹舞い上がり、パンパン大きな音を出したり火を吐いたりするのを見て、茶化すように言った。

「ミス ブラウン。校長先生のところに走って行って、この教室に逃亡した花火がいると報告してくれませんか？」

結局のところ、アンブリッジ先生は校長として最初の日の午後を、学校中を飛び回って過ごした。

先生方が、校長なしではなぜか自分の教室から花火を追い払えないと、校長を呼び出したからだ。

最後の終業ベルが鳴り、みんながカバンを持ってグリフィンボール塔に帰る途中、ハリーは、フリットウィック先生の教室からよれよれになって出てくるアンブリッジを見た。

髪振り乱し、煤だらけで汗ばんだ顔のアンブリッジを見て、ハリーは大いに満足した。

「先生、どうもありがとう！」フリットウィック先生の小さなキーキー声が聞こえた。

「線香花火はもちろん私でも退治できたのですが、なにしろ、そんな権限があるかどうかははっきりわからなかったのです」

フリットウィック先生は、にっこり笑って、噛みつきそうな顔のアンブリッジの鼻先で教室のドアを閉めた。

その夜のグリフィンボール談話室で、フレッドとジョージは英雄だった。

ハーマイオニーでさえ、興奮した生徒たちを掻き分けて、二人におめでとうを言った。

「すばらしい花火だったわ」ハーマイオニーが賞賛した。

「ありがとよ」ジョージは、驚いたようなうれいような顔をした。

「『ウィーズリーの暴れバンバン花火』さ。問題は、ありったけの在庫を便ちまったから、またゼロから作り直しのさ」

「それだけの価値ありだったよ」フレッドは大騒ぎのグリフィンボール生から注文を取りながら言った。

「順番待ちリストに名前を書くな、ハーマイオニー、『基本火遊びセット』が五ガリオン、『デラックス大爆発』が二十ガリオン…」

of laughter from his face. “Oh, I hope she tries Vanishing them next. ... They multiply by ten every time you try. ...”

The fireworks continued to burn and to spread all over the school that afternoon. Though they caused plenty of disruption, particularly the firecrackers, the other teachers did not seem to mind them very much.

“Dear, dear,” said Professor McGonagall sardonically, as one of the dragons soared around her classroom, emitting loud bangs and exhaling flame. “Miss Brown, would you mind running along to the headmistress and informing her that we have an escaped firework in our classroom?”

The upshot of it all was that Professor Umbridge spent her first afternoon as headmistress running all over the school answering the summonses of the other teachers, none of whom seemed able to rid their rooms of the fireworks without her. When the final bell rang and the students were heading back to Gryffindor Tower with their bags, Harry saw, with immense satisfaction, a disheveled and soot-blackened Umbridge tottering sweaty-faced from Professor Flitwick’s classroom.

“Thank you so much, Professor!” said Professor Flitwick in his squeaky little voice. “I could have got rid of the sparklers myself, of course, but I wasn’t sure whether I had the *authority*. ...”

Beaming, he closed his classroom door in her snarling face.

Fred and George were heroes that night in the Gryffindor common room. Even Hermione fought her way through the excited crowd around them to congratulate them.

“They were wonderful fireworks,” she said

ハーマイオニーはハリーとロンがいるテーブルに戻った。

二人ともカバンを睨み、中の宿題が飛び出して、独りでに片づいてくれないかとも思っているような顔だった。

「まあ、今晚は休みにしたら？」ハーマイオニーが朗らかに言った。

ちょうどそのとき、ウィーズリー ロケット花火が銀色の尾を引いて窓の外を通り過ぎていった。

「だって、金曜からはイースター休暇だし、そしたら時間はたっぷりあるわ」

「気分は悪くないか？」ロンが信じられないという顔でハーマイオニーを見つめた。

「聞かれたから言うけど」ハーマイオニーはうれしそうに言った。

「なんていうか……気分はちょっと……反抗的なもの」

一時間後、ハリーがロンと二人で寝室に戻ってきたとき、逃げた爆竹のパンパンという音が、まだ遠くで聞こえていた。

服を脱いでいると、線香花火が塔の前をふわふわ飛んでいった。

しっかりと文字を描き続けているークソ〜

ー。

ハリーは欠伸をしてベッドに入った。

メガネを外すと、窓の外を時々通り過ぎる花火がぼやけて、暗い空に浮かぶ、美しくも神秘的な、煌く雲のように見えた。

アンブリッジがダンブルドアの仕事に就いての一日目を、どんなふうに感じているだろうと思いながら、ハリーは横向きになった。

そして、ほとんど一日中、学校が大混乱だったと聞いたら、ファッジがどういう反応を示すだろうと思った。

独りでニヤニヤしながら、ハリーは目を閉じた……。

校庭に逃げ出した花火の、シュルシュル、パンパンという音が、遠退いたような気がする……いや、もしかしたら、ハリーが花火から急速に遠ざかっていたのかもしれない……。ハリーは、まっすぐ、神秘部に続く廊下に降り立った。

飾りも何もない黒い扉に向かって、ハリーは急いでいた……。開け……。開け……。

admiringly.

“Thanks,” said George, looking both surprised and pleased. “Weasleys’ Wildfire Whiz-Bangs. Only thing is, we used our whole stock, we’re going to have to start again from scratch now. ...”

“It was worth it, though,” said Fred, who was taking orders from clamoring Gryffindors. “If you want to add your name to the waiting list, Hermione, it’s five Galleons for your Basic Blaze box and twenty for the Deflagration Deluxe. ...”

Hermione returned to the table where Harry and Ron were sitting staring at their schoolbags as though hoping their homework might spring out of it and start doing itself.

“Oh, why don’t we have a night off?” said Hermione brightly, as a silver-tailed Weasley rocket zoomed past the window. “After all, the Easter holidays start on Friday, we’ll have plenty of time then. ...”

“Are you feeling all right?” Ron asked, staring at her in disbelief.

“Now you mention it,” said Hermione happily, “d’you know ... I think I’m feeling a bit ... *rebellious*.”

Harry could still hear the distant *bangs* of escaped firecrackers when he and Ron went up to bed an hour later, and as he got undressed a sparkler floated past the tower, still resolutely spelling out the word POO.

He got into bed, yawning. With his glasses off, the occasional fire-work still passing the window became blurred, looking like sparkling clouds, beautiful and mysterious against the black sky. He turned onto his side, wondering how Umbridge was feeling about her first day in Dumbledore’s job, and how Fudge would react when he heard that the school had spent

扉が開いた。ハリーは同じような扉がずらりと並ぶ円い部屋の中にいた……部屋を横切り、他とまったく見分けのつかない扉の一つに手を掛けた。

扉はパッと内側に開いた……。

ハリーは、細長い、長方形の部屋の中にいた。

部屋は機械的なコチコチという奇妙な音で一杯だ。

壁には点々と灯りが踊っていた。

しかし、ハリーは立ち止まって調べはしなかった……先に進まなければ……。

一番奥に扉がある……その扉も、ハリーが触れると開いた。

今度は、薄明かりの、教会のように高く広い部屋で、何段も何段も高く聳える棚があり、その一つひとつに、小さな、埃っぽいガラス繊維の球が置いてある……いまやハリーの心臓は、興奮で激しく動悸していた……どこに行くべきか、ハリーにはわかっていた……ハリーは駆けだした。しかし、人気のない巨大な部屋は、ハリーの足音をまったく響かせなかった……。

この部屋に、自分のほしいものが、とてもほしいものがあるのだ……。

自分のほしいもの……それとも別の誰かがほしいもの……。

ハリーの傷痕が痛んだ……。

バーン！

ハリーはたちまち目を覚ました。混乱していたし、腹が立った。暗い寝室は笑い声に満ちていた。

「かっこいい！」窓の前に立ったシェーマスの黒い影が言った。

「ネズミ花火とロケット花火がぶつかって、ドッキングしちゃったみたいだぜ。来て見てごらんよ！」

ロンとディーナが、よく見ようと、慌ててベッドから飛び出す音が聞こえた。

ハリーは黙って、身動きもせずに横たわっていた。

傷痕の痛みは薄らいでいたが、失望感がひたひたと押し寄せていた。

すばらしいご馳走が、最後の最後に引ったくられたような気分だった……今度こそあんな

most of the day in a state of advanced disruption. ... Smiling to himself, he closed his eyes. ...

The whizzes and bangs of escaped fireworks in the grounds seemed to be growing more distant ... or perhaps he, Harry, was simply speeding away from them. ...

He had fallen right into the corridor leading to the Department of Mysteries. He was speeding toward the plain black door. ... *Let it open. ... Let it open. ...*

It did. He was inside the circular room lined with doors. ... He crossed it, placed his hand upon an identical door, and it swung inward. ...

Now he was in a long, rectangular room full of an odd, mechanical clicking. There were dancing flecks of light on the walls but he did not pause to investigate. ... He had to go on. ...

There was a door at the far end. ... It too opened at his touch. ...

And now he was in a dimly lit room as high and wide as a church, full of nothing but rows and rows of towering shelves, each laden with small, dusty, spun-glass spheres. ... Now Harry's heart was beating fast with excitement. ... He knew where to go. ... He ran forward, but his footsteps made no noise in the enormous, deserted room. ...

There was something in this room he wanted very, very much. ...

Something he wanted. ... or somebody else wanted. ...

His scar was hurting. ...

**BANG!** Harry awoke instantly, confused and angry. The dark dormitory was full of the sound of laughter.

に近づいていたのに。

ピンクと銀色に輝く羽の争えた子豚が、ちょうどグリフィンボール塔を飛び過ぎていった。その下で、グリフィンボール生が、ウワーッと歓声をあげるのを、ハリーは横たわったまま聞いていた。明日の夜、「閉心術」の訓練があることを思い出すと、ハリーの胃袋が揺れ、吐き気がした。

一番新しい夢で神秘部にさらに深く入り込んだことをスネイプが知ったら、何と言うだろうと、次の日、ハリーは一日中それを恐れていた。

前回の特訓以来、一度も「閉心術」を練習していなかったことに気づき、ハリーは罪悪感が込み上げてきた。ダンブルドアがいなくなってから、あまりにいろいろなことが起こり、たとえ努力したところで、心を空にすることはできなかったろうと、ハリーにはわかっていて。

しかし、そんな言い訳はスネイプに通じないだろうと思った。

その日の授業中に、ハリーは少しでも泥縄式の練習をしてみたが、うまくいかなかった。すべての想念や感情を締め出そうとして黙りこくるたびに、ハーマイオニーがどうかしたのかと聞くのだ。

それに、先生方が復習の質問を次々とぶつけてくる授業中は、頭を空にするのに最適の時間とは言えなかった。

しかし何故ハーマイオニーは僕の細かい変化に気付くのだろうとハリーは訝った。

最悪を覚悟し、ハリーは夕食後、スネイプの研究室に向かった。

しかし、玄関ホールを半分ほど横切ったところで、チョウが急いで追ってきた。

「こっちへ」

スネイプと会う時間を先延ばしにする理由が見つかったのがうれしくて、ハリーはチョウに合図し、玄関ホールの巨大な砂時計の置いてある片隅に呼んだ。

グリフィンボールの砂時計は、いまやほとんど空っぽだった。

「大丈夫かい？ アンブリッジが君に D A のことを聞いたりしなかった？」

「ううん」チョウが急いで答えた。

“Cool!” said Seamus, who was silhouetted against the window.

“I think one of those Catherine wheels hit a rocket and it’s like they mated, come and see!”

Harry heard Ron and Dean scramble out of bed for a better look. He lay quite still and silent while the pain in his scar subsided and disappointment washed over him. He felt as though a wonderful treat had been snatched from him at the very last moment. ... He had got so close that time. ...

Glittering, pink-and-silver winged piglets were now soaring past the windows of Gryffindor Tower. Harry lay and listened to the appreciative whoops of Gryffindors in the dormitories below them. His stomach gave a sickening jolt as he remembered that he had Occlumency the following evening. ...

Harry spent the whole of the next day dreading what Snape was going to say if he found out how much farther into the Department of Mysteries he had penetrated during his last dream. With a surge of guilt he realized that he had not practiced Occlumency once since their last lesson: There had been too much going on since Dumbledore had left. He was sure he would not have been able to empty his mind even if he had tried. He doubted, however, whether Snape would accept that excuse. ...

He attempted a little last-minute practice during classes that day, but it was no good, Hermione kept asking him what was wrong whenever he fell silent trying to rid himself of all thought and emotion and, after all, the best moment to empty his brain was not while teachers were firing review questions at the class.

「そうじゃないの。ただ……あの、私、あなたに言いたくて……ハリー、マリエッタが告げ口するなんて、私、夢にも……」

「ああ、まあ」ハリーは塞ぎ込んで言った。チョウがもう少し慎重に友達を選んだほうがいいと思ったのは確かだ。最新情報では、マリエッタがまだ医務室に入院中で、マダムボンフリーは吹出物をまったくどうすることもできないと聞いていたが、ハリーの腹の虫は治まらなかった。

「マリエッタはとってもいい人よ」チョウが言った。

「過ちを犯しただけなの」

ハリーは信じられないという顔でチョウを見た。

「過ちを犯したけどいい人？ あの子は君も含めて、僕たち全員を売ったんだ！」

「でも……全員逃げたでしょう？」チョウが縋るように言った。

「あのね、マリエッタのママは魔法省に勤めているの。あの人にとっては、本当に難しいこと——」

「ロンのパパだって魔法省に勤めてるよ！」ハリーは憤慨した。

「それに、気づいてないなら言うけど、ロンの顔には『密告者』なんて書いてない——」

「ハーマイオニー グレンジャーって、ほんとにひどいやり方をするのね」チョウが激しい口調で言った。

「あの名簿に呪いをかけたって、私たちに教えるべきだったわ——」

「僕はすばらしい考えだったと思う」ハリーは冷たく言った。

チョウの顔にパッと血が上り、目が光りだした。

「ああ、そうだった。忘れていたわ——もちろん、あれは愛しいハーマイオニーのお考えだったわね——」

「また泣きだすのはごめんだよ」ハリーは警戒するように言った。

「そんなつもりはなかったわ！」チョウが叫んだ。

「そう……まあ……よかった」ハリーが言った。

「僕、いま、いろいろやるのがいっぱい

Resigned to the worst, he set off for Snape's office after dinner. Halfway across the entrance hall, however, Cho came hurrying up to him.

“Over here,” said Harry, glad of a reason to postpone his meeting with Snape and beckoning her across to the corner of the entrance hall where the giant hourglasses stood. Gryffindor's was now almost empty. “Are you okay? Umbridge hasn't been asking you about the D.A., has she?”

“Oh no,” said Cho hurriedly. “No, it was only ... Well, I just wanted to say ... Harry, I never dreamed Marietta would tell. ...”

“Yeah, well,” said Harry moodily. He did feel Cho might have chosen her friends a bit more carefully. It was small consolation that the last he had heard, Marietta was still up in the hospital wing and Madam Pomfrey had not been able to make the slightest improvement to her pimples.

“She's a lovely person really,” said Cho. “She just made a mistake ——”

Harry looked at her incredulously.

“A lovely person who made a mistake? She sold us all out, including you!”

“Well ... we all got away, didn't we?” said Cho pleadingly. “You know, her mum works for the Ministry, it's really difficult for her ——”

“Ron's dad works for the Ministry too!” Harry said furiously. “And in case you hadn't noticed, he hasn't got ‘sneak’ written across *his* face ——”

“That was a really horrible trick of Hermione Granger's,” said Cho fiercely. “She should have told us she'd jinxed that list ——”

“I think it was a brilliant idea,” said Harry coldly. Cho flushed and her eyes grew brighter.

“Oh yes, I forgot —— of course, if it was



大変なんだ」

「じゃ、さっさとやればいいでしょう！」チョウは怒ってくるりと背を向け、つんつんと去っていった。

ハリーは憤慨しながらスネイプの地下牢への階段を下りていった。

怒ったり恨んだりしながらスネイプのところに行けば、スネイプはよりやすやすとハリーの心に侵入するだろうと、経験でわかっていたが、研究室のドアに辿り着くまですっと、マリエッタのことでチョウにもう少し言ってるべきだったと思うばかりで、結局どうにもならなかった。

「遅刻だぞ、ポッター」ハリーがドアを閉めると、スネイプが冷たく言った。

スネイプは、ハリーに背を向けて立ち、いつものように、想いをいくつか取り出しては、ダンブルドアの「憂いの篩」に注意深くしまっているところだった。

最後の銀色の一筋を石の水盆にしまい終ると、スネイプはハリーのほうを振り向いた。

「で？」スネイプが言った。

「練習はしていたのか？」

「はい」ハリーはスネイプの机の脚の一本をしっかりと見つめながら、嘘をついた。

「まあ、すぐにわかることだがな」スネイプは澀みなく言った。

「杖を構えろ、ポッター」

ハリーはいつもの場所に移動し、机を挟んでスネイプと向き合った。

チョウへの怒りと、スネイプが自分の心をどのくらい引っ張り出すのだろうかという不安で、ハリーは動悸がした。

「では、三つ数えて」スネイプが面倒臭そうに言った。

「一——二——」

部屋のドアがバタンと開き、ドラコ マルフォイが走り込んできた。

「スネイプ先生——あ——すみません——」

マルフォイはスネイプとハリーを、少し驚いたように見た。

「かまわん、ドラコ」スネイプが杖を下ろしながら言った。

「ポッターは『魔法薬』の補習授業に来てい

darling *Hermione's* idea —”

“Don’t start crying again,” said Harry warningly.

“I wasn’t going to!” she shouted.

“Yeah ... well ... good,” he said. “I’ve got enough to cope with at the moment.”

“Go and cope with it then!” she said furiously, turning on her heel and stalking off.

Fuming, Harry descended the stairs to Snape’s dungeon, and though he knew from experience how much easier it would be for Snape to penetrate his mind if he arrived angry and resentful, he succeeded in nothing but thinking of a few more good things he should have said to Cho about Marietta before reaching the dungeon door.

“You’re late, Potter,” said Snape coldly, as Harry closed the door behind him.

Snape was standing with his back to Harry, removing, as usual, certain of his thoughts and placing them carefully in Dumbledore’s Pensieve. He dropped the last silvery strand into the stone basin and turned to face Harry.

“So,” he said. “Have you been practicing?”

“Yes,” Harry lied, looking carefully at one of the legs of Snape’s desk.

“Well, we’ll soon find out, won’t we?” said Snape smoothly. “Wand out, Potter.”

Harry moved into his usual position, facing Snape with the desk between them. His heart was pumping fast with anger at Cho and anxiety about how much Snape was about to extract from his mind.

“On the count of three then,” said Snape lazily. “One — two —”

Snape’s office door banged open and Draco Malfoy sped in.

る」

マルフォイのこんなにうれしそうな顔をハリーが見たのは、アンブリッジがハグリッドの査察に来て以来だった。

「知りませんでした」マルフォイはハリーを意地悪い目つきで見た。

ハリーは自分でも顔が真っ赤になっているのがわかった。

マルフォイに向かって、本当のことを叫ぶことができたならどんなにいいだろう。

——いや、いっそ、強力な呪いをかけてやれたらもっといい。

「さて、ドラコ、何の用だね？」スネイプが聞いた。

「アンブリッジ先生のご用で——スネイプ先生に助けにいただきたいそうです」マルフォイが答えた。

「モンタギューが見つかったんです、先生。五階のトイレに詰まっていました」

「どうやってそんなところに？」スネイプが詰問した。

「わかりません、先生。モンタギューは少し混乱しています」

「よし、わかった。ポッター」スネイプが言った。

「この授業は明日の夕方にやり直しだ」

スネイプは向きを変えて研究室からさっと出ていった。

あとに従いて部屋を出る前に、マルフォイはスネイプの背後で、口の形だけでハリーに言った。

「ま ほ う や く の ほ し ゅ う？」

怒りで煮えくり返りながら、ハリーは杖をローブにしまい、部屋を出ようとした。

どっちみち二十四時間は練習できる。

危ういところを逃れられたのはありがたかったが、「魔法薬」の補習が必要だと、マルフォイが学校中に触れ回るという代償つきでは、素直に喜べなかった。

研究室のドアのところまで来たとき、何かが見えた。

扉の枠にちらちらと灯りが踊っていた。

ハリーの足が止まった。

立ち止まって灯りを見た。

“Professor Snape, sir — oh — sorry —”

Malfoy was looking at Snape and Harry in some surprise.

“It’s all right, Draco,” said Snape, lowering his wand. “Potter is here for a little Remedial Potions.”

Harry had not seen Malfoy look so gleeful since Umbridge had turned up to inspect Hagrid.

“I didn’t know,” he said, leering at Harry, who knew his face was burning. He would have given a great deal to be able to shout the truth at Malfoy — or, even better, to hit him with a good curse.

“Well, Draco, what is it?” asked Snape.

“It’s Professor Umbridge, sir — she needs your help,” said Malfoy. “They’ve found Montague, sir. He’s turned up jammed inside a toilet on the fourth floor.”

“How did he get in there?” demanded Snape.

“I don’t know, sir, he’s a bit confused. ...”

“Very well, very well — Potter,” said Snape, “we shall resume this lesson tomorrow evening instead.”

He turned and swept from his office. Malfoy mouthed “*Remedial Potions?*” at Harry behind Snape’s back before following him.

Seething, Harry replaced his wand inside his robes and made to leave the room. At least he had twenty-four more hours in which to practice; he knew he ought to feel grateful for the narrow escape, though it was hard that it came at the expense of Malfoy telling the whole school that he needed Remedial Potions. ...

He was at the office door when he saw it: a

何か思い出しそうだ……そして、思い出した。

昨夜の夢で見た灯りにどこか似ている。

神秘部を通り抜けるあの旅で、二番目に通過した部屋の灯りだ。

ハリーは振り返った。

その灯りは、スネイプの机に置かれた「憂いの篩」から射していた。

銀白色のものが、中に吸い込まれ、渦巻いている。

スネイプの想い……ハリーがまぐれでスネイプの護りを破ったときに、ハリーに見られたくないもの……。

ハリーは「憂いの篩」をじっと見た。

好奇心が湧き上がってくる……。

スネイプがそんなにもハリーから隠したかったのは、何だろう？

銀色の灯りが壁に揺らめいた……ハリーは考え込みながら、机に二歩近づいた。

もしかして、スネイプが絶対に見せたくないのは、神秘部についての情報ではないのか？

ハリーは背後を見た。心臓がこれまで以上に強く、速く鼓動している。

スネイプがモンタギューをトイレから助け出すのに、どのくらいかかるだろう？ そのあとまっすぐ研究室に戻るだろうか、それともモンタギューを連れて医務室に行くだろうか？ 絶対医務室だ。

……モンタギューはスリザリンのクイディッチチームのキャプテンだもの。

スネイプは、モンタギューが大丈夫だということを、確かめたいに違いない。

ハリーは「憂いの篩」まで、あと数歩を歩き、その上に屈み込み、その深みをじっと見た。

ハリーは躊躇し、耳を澄ませ、それから再び杖を取り出した。

研究室も、外の廊下もしくんとしている。

ハリーは杖の先で、「憂いの篩」の中身を軽く突いた。

中の銀色の物質が、急速に渦を巻き出した。

覗き込むと、中身が透明になっているのが見えた。

またしてもハリーは、天井の丸窓から覗き込むような形で、一つの部屋を覗いていた……

patch of shivering light dancing on the door frame. He stopped, looking at it, reminded of something. ... Then he remembered: It was a little like the lights he had seen in his dream last night, the lights in the second room he had walked through on his journey through the Department of Mysteries.

He turned around. The light was coming from the Pensieve sitting on Snape's desk. The silver-white contents were ebbing and swirling within. Snape's thoughts ... things he did not want Harry to see if he broke through Snape's defenses accidentally. ...

Harry gazed at the Pensieve, curiosity welling inside him. ... What was it that Snape was so keen to hide from Harry?

The silvery lights shivered on the wall. ... Harry took two steps toward the desk, thinking hard. Could it possibly be information about the Department of Mysteries that Snape was determined to keep from him?

Harry looked over his shoulder, his heart now pumping harder and faster than ever. How long would it take Snape to release Montague from the toilet? Would he come straight back to his office afterward, or accompany Montague to the hospital wing? Surely the latter ... Montague was Captain of the Slytherin Quidditch team, Snape would want to make sure he was all right. ...

Harry walked the remaining few feet to the Pensieve and stood over it, gazing into its depths. He hesitated, listening, then pulled out his wand again. The office and the corridor beyond were completely silent. He gave the contents of the Pensieve a small prod with the end of his wand.

The silvery stuff within began to swirl very fast. Harry leaned forward over it and saw that it had become transparent. He was, once again,

いや、もしあまり見当違いでなければ、そこは大広間だ。

ハリーの息が、スネイプの想いの表面を本当に曇らせていた……脳みそが停止したみたいだ……強い誘惑に駆られてこんなことをするのは、正気の沙汰じゃない……ハリーは震えていた……スネイプはいまにも戻ってくるかもしれない……しかし、チョウのあの怒り、マルフォイの嘲るような顔を思い出すと、ハリーはどうにでもなれと向こう見ずな気持ちになっていた。

ハリーはがぶっと大きく息を吸い込み、顔をスネイプの想いに突っ込んだ。

たちまち、研究室の床が傾き、ハリーは「憂いの篩」に頭からのめり込んだ……。

冷たい暗闇の中を、ハリーは独楽のように回りながら落ちていった。

そして……。

ハリーは大広間の真ん中に立っていた。

しかし、四つの寮のテーブルはない。

代わりに、百以上の小机がみな同じ方向を向いて並んでいる。

それぞれに生徒が座り、俯いて羊皮紙の巻紙に何かを書いている。

聞こえる音といえば、カリカリという羽根ペンの音と、時々誰かが羊皮紙をずらす音だけだった。

試験の時間に違いない。

高窓から陽の光が流れ込んで、俯いた頭に射しかかり、明るい光の中で髪が栗色や銅色、金色に輝いている。

ハリーは注意深く周りを見回した。

スネイプがどこかにいるはずだ……これはスネイプの記憶なのだから……。

見つけた。

ハリーのすぐ後ろの小机だ。

ハリーは目を見張った。

十代のスネイプは、筋張って生氣のない感じだった。

ちょうど、暗がりで育った植物のようだ。

髪は脂っこく、だらりと垂れて机の上で揺れている。

釣鼻を羊皮紙にくっつけんばかりにして、何か書いている。

ハリーはその背後に回り、試験の題を見た。

looking down into a room as though through a circular window in the ceiling. ... In fact, unless he was much mistaken, he was looking down upon the Great Hall. ...

His breath was actually fogging the surface of Snape's thoughts. ... His brain seemed to be in limbo. ... It would be insane to do the thing that he was so strongly tempted to do. ... He was trembling. ... Snape could be back at any moment ... but Harry thought of Cho's anger, of Malfoy's jeering face, and a reckless daring seized him.

He took a great gulp of breath and plunged his face into the surface of Snape's thoughts. At once, the floor of the office lurched, tipping Harry headfirst into the Pensieve. ...

He was falling through cold blackness, spinning furiously as he went, and then —

He was standing in the middle of the Great Hall, but the four House tables were gone. Instead there were more than a hundred smaller tables, all facing the same way, at each of which sat a student, head bent low, scribbling on a roll of parchment. The only sound was the scratching of quills and the occasional rustle as somebody adjusted their parchment. It was clearly exam time.

Sunshine was streaming through the high windows onto the bent heads, which shone chestnut and copper and gold in the bright light. Harry looked around carefully. Snape had to be here somewhere. ... This was *his* memory. ...

And there he was, at a table right behind Harry. Harry stared. Snape-the-teenager had a stringy, pallid look about him, like a plant kept in the dark. His hair was lank and greasy and was flopping onto the table, his hooked nose barely half an inch from the surface of the parchment as he scribbled. Harry moved

「闇の魔術に対する防衛術——普通魔法レベル」

スネイプは十五か十六で、ハリーと同じぐらいの歳だ。

スネイプの手が羊皮紙の上を飛ぶように動いている。

少なくとも一番近くにいる生徒たちより三十センチは長いし、しかも字が細かくてびっしりと書いている。

「あと五分！」

その声でハリーは飛び上がった。

振り向くと、少し離れたところに、机の間を動いているフリットウィック先生の頭のとっぺんが見えた。

フリットウィック先生はくしゃくしゃな黒髪の男の子の脇を通り過ぎた……本当にくしゃくしゃな黒髪だ……。

ハリーは素速く動いた。

あまりに速くて、もし体があったら、机をいくつかなぎ倒していたかもしれない。

そうはならず、ハリーは夢の中のようにすると、机の間の通路を二つ過ぎ、三つ目に移動した。

黒髪の男の子の後頭部がだんだん近づいてきた……いま、背筋を伸ばし、羽根ペンを置き、自分の書いたものを読み返すのに、羊皮紙の巻物を手繰り寄せている……。

ハリーは机の前で止まり、十五歳の父親をじっと見下ろした。

胃袋の奥で、興奮が弾けた。

自分自身を見つめているようだったが、わざと間違えたような違いがいくつかあった。

ジェームズの目はハシバミ色で、鼻はハリーより少し高い。

それに額には傷痕がない。

しかし、ハリーと同じ細面で、口も眉も同じだ。

ジェームズの髪は、ハリーとまったく同じに、頭の後ろでぴんぴん突っ立っている。両手はハリーの手と言ってもいいぐらいだ。それに、ジェームズが立ち上がれば、背丈は数センチと違わないだろうと見当がつく。

ジェームズは大欠伸をし、髪を掻きむしり、ますますくしゃくしゃにした。

それからフリットウィック先生をちらりと見

around behind Snape and read the heading of the examination paper:

## DEFENSE AGAINST THE DARK ARTS — ORDINARY WIZARDING LEVEL

So Snape had to be fifteen or sixteen, around Harry's own age. His hand was flying across the parchment; he had written at least a foot more than his closest neighbors, and yet his writing was minuscule and cramped.

“Five more minutes!”

The voice made Harry jump; turning, he saw the top of Professor Flitwick's head moving between the desks a short distance away. Professor Flitwick was walking past a boy with untidy black hair ... very untidy black hair. ...

Harry moved so quickly that, had he been solid, he would have knocked desks flying. Instead he seemed to slide, dreamlike, across two aisles and up a third. The back of the black-haired boy's head drew nearer and nearer. ... He was straightening up now, putting down his quill, pulling his roll of parchment toward him so as to reread what he had written. ...

Harry stopped in front of the desk and gazed down at his fifteen-year-old father.

Excitement exploded in the pit of his stomach: It was as though he was looking at himself but with deliberate mistakes. James's eyes were hazel, his nose was slightly longer than Harry's, and there was no scar on his forehead, but they had the same thin face, same mouth, same eyebrows. James's hair stuck up at the back exactly as Harry's did, his hands could have been Harry's, and Harry could tell

て、椅子に座ったまま振り返り、四列後ろの男の子を見てにやりとした。

ハリーはまた興奮でドキッとした。  
シリウスが、ジェームズに親指を上げて、オーケーの合図をするのが見えたのだ。  
シリウスは椅子を反っくり返らせて二本脚で支え、のんびりもたれ掛かっていた。  
とてもハンサムだ。

黒髪が、ジェームズもハリーも絶対まねできないやり方で、はらりと優雅に目のあたりにかかっている。

そのすぐ後ろに座っている女の子が、気を引いたような目でシリウスを見ていたが、シリウスは気づかない様子だ。

その女の子の横二つ目の席に——ハリーの胃袋が、またまたうれしさにくねった——リーマス ルーピンがいる。

かなり青白く、病気のようだ（満月が近いのだろうか？）。

試験に没頭している。

答えを読み返ししながら、羽根ペンの羽根の先で顎を搔き、少し顔をしかめている。

ということは、ワームテールもどこかそのあたりにいるはずだ……やっぱりいた。

すぐ見つかった。

鼻の尖がった、くすんだ茶色の髪の子の小さな子だ。

不安そうだ。

爪を噛み、答案をじっと見ながら、足の指で床を引っ掻いている。

時々、あわよくばと、周りの生徒の答案を盗み見ている。

ハリーはしばらくワームテールを見つめていたが、やがてジェームズに視線を戻した。

こんどは、羊皮紙の切れ端に落書きをしている。

スニッチを描き、「L E」という文字をなぞっている。

何の略字だろう？

「はい、羽根ペンを置いて！」フリットウィック先生がキーキー声で言った。

「こら、君もだよ、ステビンス！答案羊皮紙を集める間、席を立たないように！『アクシオ、来い！』」

百巻以上の羊皮紙が宙を飛び、フリットウィ

that when James stood up, they would be within an inch of each other's heights.

James yawned hugely and rumpled up his hair, making it even messier than it had been. Then, with a glance toward Professor Flitwick, he turned in his seat and grinned at a boy sitting four seats behind him.

With another shock of excitement, Harry saw Sirius give James the thumbs-up. Sirius was lounging in his chair at his ease, tilting it back on two legs. He was very good-looking; his dark hair fell into his eyes with a sort of casual elegance neither James's nor Harry's could ever have achieved, and a girl sitting behind him was eyeing him hopefully, though he didn't seem to have noticed. And two seats along from this girl — Harry's stomach gave another pleasurable squirm — was Remus Lupin. He looked rather pale and peaky (was the full moon approaching?) and was absorbed in the exam: As he reread his answers he scratched his chin with the end of his quill, frowning slightly.

So that meant Wormtail had to be around here somewhere too ... and sure enough, Harry spotted him within seconds: a small, mousy-haired boy with a pointed nose. Wormtail looked anxious; he was chewing his fingernails, staring down at his paper, scuffing the ground with his toes. Every now and then he glanced hopefully at his neighbor's paper. Harry stared at Wormtail for a moment, then back at James, who was now doodling on a bit of scrap parchment. He had drawn a Snitch and was now tracing the letters L. E. What did they stand for?

“Quills down, please!” squeaked Professor Flitwick. “That means you too, Stebbins! Please remain seated while I collect your parchment! *Accio!*”

ック先生の伸ばした両腕にブーンと飛び込み先生を反動で吹っ飛ばした。

何人かの生徒が笑った。

前列の数人が立ち上がって、フリットウィック先生の肘を抱え込んで助け起こした。

「ありがとう……ありがとう」フリットウィック先生は喘ぎながら言った。

「さあ、みなさん、出てよろしい！」

ハリーは父親を見下ろした。

すると、落書きでいろいろ飾り模様をつけていた「L E」をグシャグシャと消して勢いよく立ち上がり、カバンに羽根ペンと試験用紙を入れてボンと肩に掛け、シリウスが来るのを待った。

ハリーが振り返って、少し離れたスネイプをちらりと見ると、玄関ホールへの扉に向かって机の間を歩いているところだった。

まだ試験問題用紙をじっと見ている。

猫背なのに角ばった体つきで、ぎくしゃくした歩き方は蜘蛛を思わせた。

脂っばい髪が、顔の周りではさばさ揺れている。

ペチャクチャしゃべる女子学生の群れが、スネイプと、ジェームズ、シリウス、ルービンとを分けていた。

その群れの真ん中に身を置くことで、ハリーはスネイプの姿を捕らえたままで、ジェームズとその仲間の声がなんとか聞こえるところにいた。

「ムーニー、第十問は気に入ったかい？」玄関ホールに出たとき、シリウスが聞いた。

「ばっちりさ」ルービンがきびきびと答えた。

「狼人間を見分ける五つの兆候を挙げよ。いい質問だ」

「全部の兆候を挙げられたと思うか？」ジェームズが心配そうな声を出してみせた。

「そう思うよ」太陽の降り注ぐ校庭に出ようと正面扉の前に集まってきた生徒の群れに加わりながら、ルービンがまじめに答えた。

「一、狼人間は僕の椅子に座っている。二、狼人間は僕の服を着ている。三、狼人間の名はリーマス ルービン」笑わなかったのはワームテールだけだった。

「僕の答えは、口元の形、瞳孔、ふさふさの

More than a hundred rolls of parchment zoomed into the air and into Professor Flitwick's outstretched arms, knocking him backward off his feet. Several people laughed. A couple of students at the front desks got up, took hold of Professor Flitwick beneath the elbows, and lifted him onto his feet again.

“Thank you ... thank you,” panted Professor Flitwick. “Very well, everybody, you're free to go!”

Harry looked down at his father, who had hastily crossed out the L. E. he had been embellishing, jumped to his feet, stuffed his quill and the exam question paper into his bag, which he slung over his back, and stood waiting for Sirius to join him.

Harry looked around and glimpsed Snape a short way away, moving between the tables toward the doors into the entrance hall, still absorbed in his own examination paper. Round-shouldered yet angular, he walked in a twitchy manner that recalled a spider, his oily hair swinging about his face.

A gang of chattering girls separated Snape from James and Sirius, and by planting himself in the midst of this group, Harry managed to keep Snape in sight while straining his ears to catch the voices of James and his friends.

“Did you like question ten, Moony?” asked Sirius as they emerged into the entrance hall.

“Loved it,” said Lupin briskly. “‘Give five signs that identify the werewolf.’ Excellent question.”

“D’you think you managed to get all the signs?” said James in tones of mock concern.

“Think I did,” said Lupin seriously, as they joined the crowd thronging around the front doors eager to get out into the sunlit grounds. “One: He’s sitting on my chair. Two: He’s

尻尾」ワームテールが心配そうに言った。  
「でも、そのほかは考えつかなかったー」  
「ワームテール、おまえ、バカじゃないか？」ジェームズが焦れったそうに言った。  
「一ヶ月に一度は狼人間に出会ってるじゃないかー」  
「小さい声で頼むよ」ルーピンが哀願した。  
ハリーは心配になってまた振り返った。  
スネイプは試験問題用紙に没頭したまま、まだ近くにいたーしかし、これはスネイプの記憶だ。  
いったん校庭に出て、スネイプが別な方向に歩き出せば、ハリーはもうジェームズを追うことができないのは明らかだ。  
しかし、ジェームズと三人の友達が湖に向かって芝生を闊歩しだすとーああよかったースネイプが従いてくる。  
まだ試験問題を熟読していて、どうやらどこに行くというはっきりした考えもないらしい。  
スネイプより少し前を歩くことで、ハリーはなんとかジェームズたちを観察し続けることができた。  
「まあ、僕はあんな試験、楽勝だと思ったね」シリウスの声が聞こえた。  
「少なくとも僕は、『O 優』が取れなきやおかしい」  
「僕もさ」そう言うと、ジェームズはポケットに手を突っ込み、バタバタもがく金色のスニッチを取り出した。  
「どこで手に入れた？」  
「ちょっと失敬したのさ」ジェームズが事もなげに言った。  
ジェームズはスニッチをもてあそびはじめた。  
三十センチほど逃がしてはパッと捕まえる。  
すばらしい反射神経だ。  
ワームテールが感服しきったように眺めていた。  
四人は湖の端にあるブナの木陰で立ち止まった。  
ハリー、ロン、ハーマイオニーが、宿題をすませるのに、そのブナの木の下で日曜日を過ごしたことがある。  
四人は芝生に体を投げ出した。

wearing my clothes. Three: His name's Remus Lupin ...”

Wormtail was the only one who didn't laugh.

“I got the snout shape, the pupils of the eyes, and the tufted tail,” he said anxiously, “but I couldn't think what else —”

“How thick are you, Wormtail?” said James impatiently. “You run round with a werewolf once a month —”

“Keep your voice down,” implored Lupin.

Harry looked anxiously behind him again. Snape remained close by, still buried in his examination questions; but this was Snape's memory, and Harry was sure that if Snape chose to wander off in a different direction once outside in the grounds, he, Harry, would not be able to follow James any farther. To his intense relief, however, when James and his three friends strode off down the lawn toward the lake, Snape followed, still poring over the paper and apparently with no fixed idea of where he was going. By jogging a little ahead of him, Harry managed to maintain a close watch on James and the others.

“Well, I thought that paper was a piece of cake,” he heard Sirius say. “I'll be surprised if I don't get Outstanding on it at least.”

“Me too,” said James. He put his hand in his pocket and took out a struggling Golden Snitch.

“Where'd you get that?”

“Kicked it,” said James casually. He started playing with the Snitch, allowing it to fly as much as a foot away and seizing it again; his reflexes were excellent. Wormtail watched him in awe.

They stopped in the shade of the very same



ハリーはまた後ろを振り返ったが、なんとうれしいことに、スネイプは灌木の茂みの暗がり、芝生に腰を下ろしていた。相変わらず O W L 試験問題用紙に没頭している。

おかげでハリーは、ブナの木と灌木の間に腰を下ろし、木陰の四人組を眺め続けることができた。

陽の光が、滑らかな湖面に眩しく、岸边には大広間からさっき出てきた女子学生のグループが座り、笑いさざめきながら、靴もソックスも脱ぎ、足を水につけて涼んでいた。ルーピンは本を取り出して読みはじめた。シリウスは芝生ではしゃいでいる生徒たちをじっと見回していた。

少し高慢ちに構え、退屈している様子だったが、それが実にハンサムだった。ジェームズは相変わらずスニッチと戯れていた。

だんだん遠くに逃がし、ほとんど逃げられそうになりながら、最後の瞬間に必ず捕まえた。

ワームテールは口をポカンと開けてジェームズを見ていた。

とくに難しい技で捕まえるたびに、ワームテールは息を呑み、手を叩いた。

五分ほど見ているうちに、ハリーは、どうしてジェームズがワームテールに、騒ぐなど言わないのか気になった。

しかし、ジェームズは注目されるのを楽しんでいるようだった。

父親を見ると、髪をくしゃくしゃにする癖がある。

あまりきちんとしないようにしているかのようだった。

それに、しょっちゅう水辺の女の子たちのほうを見ていた。

「それ、しまえよ」ジェームズがすばらしいキャッチを見せ、ワームテールが歓声をあげる傍で、シリウスがとうとうそう言った。

「ワームテールが興奮して漏らしちゃう前に」ワームテールが少し赤くなったが、ジェームズはニヤッとした。

「君が気になるならね」ジェームズはスニッチをポケットにしまった。

beech tree on the edge of the lake where Harry, Ron, and Hermione had spent a Sunday finishing their homework, and threw themselves down on the grass.

Harry looked over his shoulder yet again and saw, to his delight, that Snape had settled himself on the grass in the dense shadows of a clump of bushes. He was as deeply immersed in the O.W.L. paper as ever, which left Harry free to sit down on the grass between the beech and the bushes and watch the foursome under the tree.

The sunlight was dazzling on the smooth surface of the lake, on the bank of which the group of laughing girls who had just left the Great Hall were sitting with shoes and socks off, cooling their feet in the water.

Lupin had pulled out a book and was reading. Sirius stared around at the students milling over the grass, looking rather haughty and bored, but very handsomely so. James was still playing with the Snitch, letting it zoom farther and farther away, almost escaping but always grabbed at the last second. Wormtail was watching him with his mouth open. Every time James made a particularly difficult catch, Wormtail gasped and applauded. After five minutes of this, Harry wondered why James didn't tell Wormtail to get a grip on himself, but James seemed to be enjoying the attention. Harry noticed his father had a habit of rumpling up his hair as though to make sure it did not get too tidy, and also that he kept looking over at the girls by the water's edge.

"Put that away, will you?" said Sirius finally, as James made a fine catch and Wormtail let out a cheer. "Before Wormtail wets himself from excitement."

Wormtail turned slightly pink but James grinned.

シリウスだけがジェームズの見せびらかしをやめさせることができるのだと、ハリーははっきりそう感じた。

「退屈だ」シリウスが言った。

「満月だったらいいのに」

「君はそう思うかもな」ルーピンが本の向こうで暗い声を出した。

「まだ『変身術』の試験がある。退屈なら、僕をテストしてくれよ。さあ……」ルーピンが本を差し出した。

しかし、シリウスはフンと鼻を鳴らした。

「そんなくだらない本は取らないよ。全部知ってる」

「これで楽しくなるかもしれないぜ、パッドフット」ジェームズがこっそり言った。

「あそこにいるやつを見ろよ……」

シリウスが振り向いた。

そして、ウサギの臭いを嗅ぎつけた猟犬のように、じっと動かなくなった。

「いいぞ」シリウスが低い声で言った。

「スニベルスだ」

ハリーは振り返ってシリウスの視線を追った。

スネイプが立ち上がり、カバンにO.W.L試験用紙をしまっていた。

スネイプが灌木の陰を出て、芝生を歩きはじめたとき、シリウスとジェームズが立ち上がった。

ルーピンとワームテールは座ったままだった。

ルーピンは本を見つめたままだったが、目が動いていなかったし、微かに眉根に皺を寄せていた。

ワームテールはわくわくした表情を浮かべ、シリウスとジェームズからスネイプへと視線を移していた。

「スニベルス、元気か？」ジェームズが大声で言った。

スネイプはまるで攻撃されるのを予測していたかのように、素早く反応した。

カバンを捨て、ロープに手を突っ込み、杖を半分ほど振り上げた。

そのときジェームズが叫んだ。

「エクスペリアームス！＜武器よ去れ＞」

スネイプの杖が、三、四メートル宙を飛び、

“If it bothers you,” he said, stuffing the Snitch back in his pocket. Harry had the distinct impression that Sirius was the only one for whom James would have stopped showing off.

“I’m bored,” said Sirius. “Wish it was full moon.”

“You might,” said Lupin darkly from behind his book. “We’ve still got Transfiguration, if you’re bored you could test me. ... Here.” He held out his book.

Sirius snorted. “I don’t need to look at that rubbish, I know it all.”

“This’ll liven you up, Padfoot,” said James quietly. “Look who it is. ...”

Sirius’s head turned. He had become very still, like a dog that has scented a rabbit.

“Excellent,” he said softly. “*Snivellus*.”

Harry turned to see what Sirius was looking at.

Snape was on his feet again, and was stowing the O.W.L. paper in his bag. As he emerged from the shadows of the bushes and set off across the grass, Sirius and James stood up. Lupin and Wormtail remained sitting: Lupin was still staring down at his book, though his eyes were not moving and a faint frown line had appeared between his eyebrows. Wormtail was looking from Sirius and James to Snape with a look of avid anticipation on his face.

“All right, *Snivellus*?” said James loudly.

Snape reacted so fast it was as though he had been expecting an attack: Dropping his bag, he plunged his hand inside his robes, and his wand was halfway into the air when James shouted, “*Expelliarmus!*”

Snape’s wand flew twelve feet into the air

トンと小さな音を立てて背後の芝生に落ちた。

シリウスが吠えるような笑い声をあげた。

「インペディメンタ! <妨害せよ>」

シリウスがスネイプに杖を向けて唱えた。スネイプは落ちた杖に飛びつく途中で、撥ね飛ばされた。

周り中の生徒が振り向いて見た。何人かは立ち上がってそろそろと近づいてきた。

心配そうな顔をしている者もあれば、おもしろがっている者もいた。

スネイプは荒い息をしながら地面に横たわっていた。

ジェームズとシリウスが杖を上げてスネイプに近づいてきた。

途中でジェームズは、水辺にいる女の子たちを、肩越しにちらりと振り返った。

ワームテールもいまや立ち上がり、よく見ようとルービンの周りをじわじわ回り込み、意地汚い顔で眺めていた。

「試験はどうだった? スニベリー?」ジェームズが聞いた。

「僕が見ていたら、こいつ、鼻を羊皮紙にくっつけてたぜ」シリウスが意地悪く言った。

「大きな油染みだらけの答案じゃ、先生方は一語も読めないだろうな」

見物人の何人かが笑った。スネイプは明らかに嫌われ者だ。

ワームテールが甲高い冷やかしの笑いをした。

スネイプは起き上がろうとしたが、呪いがまだ効いている。

見えない縄で縛られているかのように、スネイプはもがいた。

「いまにー見てろ」スネイプは喘ぎながら、憎しみそのものという表情でジェームズを睨みつけた。

「憶えてろ!」

「なにを?」シリウスが冷たく言った。

「何をするつもりなんだ? スニベリー? 僕たちに洩でも引っかけるともりか?」

スネイプは悪態と呪いを一緒にくたに、次々と吐きかけたが、杖が三メートルも離れていては何の効き目もなかった。

「口が汚いぞ」ジェームズが冷たく言った。

「スコージファイ! <清めよ>」

and fell with a little thud in the grass behind him. Sirius let out a bark of laughter.

“*Impedimenta!*” he said, pointing his wand at Snape, who was knocked off his feet, halfway through a dive toward his own fallen wand.

Students all around had turned to watch. Some of them had gotten to their feet and were edging nearer to watch. Some looked apprehensive, others entertained.

Snape lay panting on the ground. James and Sirius advanced on him, wands up, James glancing over his shoulder at the girls at the water’s edge as he went. Wormtail was on his feet now, watching hungrily, edging around Lupin to get a clearer view.

“How’d the exam go, Snivelly?” said James.

“I was watching him, his nose was touching the parchment,” said Sirius viciously. “There’ll be great grease marks all over it, they won’t be able to read a word.”

Several people watching laughed; Snape was clearly unpopular. Wormtail sniggered shrilly. Snape was trying to get up, but the jinx was still operating on him; he was struggling, as though bound by invisible ropes.

“You — wait,” he panted, staring up at James with an expression of purest loathing. “You — wait. ...”

“Wait for what?” said Sirius coolly. “What’re you going to do, Snivelly, wipe your nose on us?”

Snape let out a stream of mixed swearwords and hexes, but his wand being ten feet away nothing happened.

“Wash out your mouth,” said James coldly. “*Scourgify!*”

たちまち、スネイプの口から、ピンクのシャボン玉が吹き出した。

泡で口が覆われ、スネイプは吐き、咽せた。

「やめなさい！」

ジェームズとシリウスがあたりを見回した。ジェームズの空いているほうの手が、すぐさま髪の毛に飛んだ。

湖の辺にいた女の子の一人だった。

たっぷりとした濃い赤毛が肩まで流れ、驚くほど緑色の、アーモンド形の限ーハリーの眼だ。

ハリーの母親だ。

「元気かい、エバンズ？」ジェームズの声が突然、快活で、深く、大人びた調子になった。

「彼にかまわないで」リリーが言った。

ジェームズを見る目が、徹底的に大嫌いだと言っていた。

「彼があなたに何をしたというの？」

「そうだな」ジェームズはそのことを考えるような様子をした。

「むしろ、こいつが存在するって事実そのものがね。わかるかな……」

取り巻いている学生の多くが笑った。

シリウスもワームテールも笑った。

しかし、本に没頭しているふりを続けているルービンも、リリーも笑わなかった。

「冗談のつもりでしょうけど」リリーが冷たく言った。

「でも、ポッター、あなたはただ、傲慢で弱い者いじめのいやなやつだわ。彼にかまわないで」

「エバンズ、僕とデートしてくれたら、やめるよ」ジェームズがすかさず言った。

「どうだい……僕とデートしてくれれば、親愛なるスニペリーには二度と杖を上げないけどな」

ジェームズの背後で、「妨害の呪い」の効き目が切れてきたスネイプが、石鱈の泡を吐き出しながら、落とした杖のほうにじりじりと這っていった。

「あなたか巨大イカのどちらかを選ぶことになっても、あなたとはデートしないわ」

リリーが言った。

「残念だったな、プロングズ」シリウスは朗

Pink soap bubbles streamed from Snape's mouth at once; the froth was covering his lips, making him gag, choking him —

“Leave him ALONE!”

James and Sirius looked around. James's free hand jumped to his hair again.

It was one of the girls from the lake edge. She had thick, dark red hair that fell to her shoulders and startlingly green almond-shaped eyes — Harry's eyes.

Harry's mother ...

“All right, Evans?” said James, and the tone of his voice was suddenly pleasant, deeper, more mature.

“Leave him alone,” Lily repeated. She was looking at James with every sign of great dislike. “What's he done to you?”

“Well,” said James, appearing to deliberate the point, “it's more the fact that he *exists*, if you know what I mean. ...”

Many of the surrounding watchers laughed, Sirius and Wormtail included, but Lupin, still apparently intent on his book, didn't, and neither did Lily.

“You think you're funny,” she said coldly. “But you're just an arrogant, bullying toerag, Potter. Leave him *alone*.”

“I will if you go out with me, Evans,” said James quickly. “Go on ... Go out with me, and I'll never lay a wand on old Snivelly again.”

Behind him, the Impediment Jinx was wearing off. Snape was beginning to inch toward his fallen wand, spitting out soapsuds as he crawled.

“I wouldn't go out with you if it was a choice between you and the giant squid,” said Lily.

らかにそう言うと、スネイプのほうを振り返った。

「おっと！」

しかし、遅すぎた。

スネイプは杖をまっすぐにジェームズに向けていた。

閃光が走り、ジェームズの頬がパッキリ割れ、ローブに血が滴った。

ジェームズがくるりと振り向いた。

二度目の閃光が走り、スネイプは空中に逆さまに浮かんでいた。

ローブが顔に覆い被さり、痩せこけた青白い両脚と、はき古して黒ずんだパンツが剥き出しになった。

小さな群れをなしていた生徒たちの多くが囁し立てた。

シリウス、ジェームズ、ワームテールは大声で笑った。

リリーの怒った顔が、一瞬笑いだしそうにピクピクしたが、「下ろしなさい！」と言った。

「承知しました」そう言うなり、ジェームズは杖をくいと上に振った。

スネイプは地面に落ちてくしゃくしゃと丸まった。

絡まったローブから抜け出すと、スネイプは素早く立ち上がって杖を構えた。

しかし、シリウスが「ペトリフィカス トタルス！<石になれ>」と唱えると、スネイプはまた転倒して、一枚板のように固くなった。

「彼にかまわないでって言ってるでしょう！」リリーが叫んだ。

いまやリリーは杖を取り出していた。

ジェームズとシリウスが、油断なく杖を見た。

「ああ、エバンズ、君に呪いをかけたくないんだ」ジェームズがまじめに言った。

「それなら、呪いを解きなさい！」

ジェームズは深いため息をつき、スネイプに向かって反対呪文を唱えた。

「ほーら」スネイプがやっと立ち上がると、ジェームズが言った。

「スニベルス、エバンズが居合わせて、ラッキーだったなー」

“Bad luck, Prongs,” said Sirius briskly, turning back to Snape. “OY!”

But too late; Snape had directed his wand straight at James; there was a flash of light and a gash appeared on the side of James’s face, spattering his robes with blood. James whirled about; a second flash of light later, Snape was hanging upside down in the air, his robes falling over his head to reveal skinny, pallid legs and a pair of graying underpants.

Many people in the small crowd watching cheered. Sirius, James, and Wormtail roared with laughter.

Lily, whose furious expression had twitched for an instant as though she was going to smile, said, “Let him down!”

“Certainly,” said James and he jerked his wand upward. Snape fell into a crumpled heap on the ground. Disentangling himself from his robes, he got quickly to his feet, wand up, but Sirius said, “*Petrificus Totalus!*” and Snape keeled over again at once, rigid as a board.

“LEAVE HIM ALONE!” Lily shouted. She had her own wand out now. James and Sirius eyed it warily.

“Ah, Evans, don’t make me hex you,” said James earnestly.

“Take the curse off him, then!”

James sighed deeply, then turned to Snape and muttered the countercurse.

“There you go,” he said, as Snape struggled to his feet again, “you’re lucky Evans was here, Snivellus —”

“I don’t need help from filthy little Mudbloods like her!”

Lily blinked. “Fine,” she said coolly. “I won’t bother in future. And I’d wash your

「あんな汚らしい『穢れた血』の助けなんか、必要ない！」  
リリーは目を瞬いた。  
「結構よ」リリーは冷静に言った。  
「これからは邪魔しないわ。それに、スニベルス、パンツは洗濯したほうがいいわね」  
「エバンズに謝れ！」ジェームズがスネイプに向かって脅すように杖を突きつけ、吼えた。  
「あなたからスネイプに謝れなんて言ってほしくないわ」リリーがジェームズのほうに向き直って叫んだ。  
「あなたもスネイプと同罪よ」  
「えっ？」ジェームズが素頓狂な声をあげた。  
「僕は一度も君のことを——何とかかんとかなんて！」  
「かっこよく見せようと思って、箒から降りたばかりみたいに髪をくしゃくしゃにしたり、つまらないスニッチなんかで見せびらかしたり、呪いをうまくかけられるからといって、気に入らないと廊下で誰彼なく呪いをかけたり——そんな思い上がりのでっかち頭を乗せて、よく箒が離陸できるわね。あなたを見てると吐き気がするわ」  
リリーはくると背を向けて、足早に行ってしまった。  
「エバンズ！」ジェームズが追いかけるように呼んだ。  
「おーい、エバンズ！」  
しかし、リリーは振り向かなかった。  
「あいつ、どういうつもりだ？」  
ジェームズは、どうでもいい質問だがというさりげない顔を装おうとして、装いきれていなかった。  
「つらつら行間を読むに、友よ、彼女は君がちょっと自惚れていると思っておるな」シリウスが言った。  
「よーし」ジェームズが、今度は頭に來たという顔をした。  
「よしー」  
また閃光が走り、スネイプはまたしても逆さ宙吊りになった。  
「誰か、僕がスコーピオのパンツを脱がせるのを見たいやつはいるか？」ジェームズが本

pants if I were you, *Snivellus*.”

“Apologize to Evans!” James roared at Snape, his wand pointed threateningly at him.

“I don’t want *you* to make him apologize,” Lily shouted, rounding on James. “You’re as bad as he is. ...”

“What?” yelped James. “I’d NEVER call you a — you-know-what!”

“Messing up your hair because you think it looks cool to look like you’ve just got off your broomstick, showing off with that stupid Snitch, walking down corridors and hexing anyone who annoys you just because you can — I’m surprised your broomstick can get off the ground with that fat head on it. You make me SICK.”

She turned on her heel and hurried away.

“Evans!” James shouted after her, “Hey, EVANS!”

But she didn’t look back.

“What is it with her?” said James, trying and failing to look as though this was a throwaway question of no real importance to him.

“Reading between the lines, I’d say she thinks you’re a bit conceited, mate,” said Sirius.

“Right,” said James, who looked furious now, “right —”

There was another flash of light, and Snape was once again hanging upside down in the air.

“Who wants to see me take off Snivelly’s pants?”

But whether James really did take off Snape’s pants, Harry never found out. A hand had closed tight over his upper arm, closed with a pincerlike grip. Wincing, Harry looked

当にスネイプのパンツを脱がせたかどうか、ハリーにはわからずじまいだった。誰かの手が、ハリーの二の腕をぎゅっとつかみ、ペンチで締めつけるように握った。痛さに怯みながら、ハリーは誰の手だろうと見回した。恐怖の戦慄が走った。成長しきった大人サイズのスネイプが、ハリーのすぐ脇に、怒りで蒼白になって立っているのが目に入ったのだ。「楽しいか？」ハリーは体が宙に浮くのを感じた。周囲の夏の日がパッと消え、ハリーは氷のような暗闇を浮き上がっていった。スネイプの手がハリーの二の腕をしっかりと握ったままだ。そして、空中で宙返りしたようなふわっとした感じとともに、ハリーの両足がスネイプの地下牢教室の石の床を打った。ハリーは再び、薄暗い、現在の魔法薬学教授研究室の、スネイプの机に置かれた「憂いの篩」のそばに立っていた。「すると」スネイプに二の腕をきつく握られているせいで、ハリーの手が痺れてきた。「すると……お楽しみだったわけだな？ ポッター？」「い、いいえ」ハリーは腕を振り離そうとした。恐ろしかった。スネイプは唇をわなわな震わせ、蒼白な顔で、歯を剥き出していった。「おまえの父親は、愉快的な男だったな？」スネイプが激しくハリーを揺すぶったので、メガネが鼻からず-落ちた。「僕は——そうは——」スネイプはありったけの力でハリーを投げ出した。ハリーは地下牢の床に叩きつけられた。「見たことは、誰にもしゃべるな！」スネイプが喚いた。「はい」ハリーはできるだけスネイプから離れて立ち上がった。「はい、もちろん、僕——」「出ていけ、出るんだ。この研究室で、二度とその面見たくない！」ドアに向かって疾走するハリーの頭上で、死

around to see who had hold of him, and saw, with a thrill of horror, a fully grown, adult-sized Snape standing right beside him, white with rage.

“Having fun?”

Harry felt himself rising into the air. The summer’s day evaporated around him, he was floating upward through icy blackness, Snape’s hand still tight upon his upper arm. Then, with a swooping feeling as though he had turned head over heels in midair, his feet hit the stone floor of Snape’s dungeon, and he was standing again beside the Pensieve on Snape’s desk in the shadowy, present-day Potions master’s study.

“So,” said Snape, gripping Harry’s arm so tightly Harry’s hand was starting to feel numb. “So ... been enjoying yourself, Potter?”

“N-no ...” said Harry, trying to free his arm.

It was scary: Snape’s lips were shaking, his face was white, his teeth were bared.

“Amusing man, your father, wasn’t he?” said Snape, shaking Harry so hard that his glasses slipped down his nose.

“I — didn’t —”

Snape threw Harry from him with all his might. Harry fell hard onto the dungeon floor.

“You will not tell anybody what you saw!” Snape bellowed.

“No,” said Harry, getting to his feet as far from Snape as he could. “No, of course I w —”

“Get out, get out, I don’t want to see you in this office ever again!”

And as Harry hurtled toward the door, a jar of dead cockroaches exploded over his head. He wrenched the door open and flew away up the corridor, stopping only when he had put

んだゴキブリの入った瓶が爆発した。  
ハリーはドアをぐいと開け、飛ぶように廊下を走った。  
スネイプとの距離が三階隔たるまで止まらなかった。  
そこでやっとハリーは壁にもたれ、ハァハァ言いながら傷ついた腕を揉んだ。  
早々とグリフィンドール塔に戻るつもりもなく、ロンやハーマイオニーにいま見たことを話す気にもなれなかった。  
ハリーは恐ろしく、悲しかった。  
怒鳴られたからでも、瓶を投げつけられたからでもない。  
見物人のど真ん中で辱められる気持ちがハリーにはわかったからだ。  
ハリーの父親に嘲られたときのスネイプの気持ちが痛いほどわかったからだ。  
そして、いま見たことから判断すると、ハリーの父親が、スネイプからいつも聞かされていたとおり、どこまでも傲慢だったからだ。

three floors between himself and Snape. There he leaned against the wall, panting, and rubbing his bruised arm.

He had no desire at all to return to Gryffindor Tower so early, nor to tell Ron and Hermione what he had just seen. What was making Harry feel so horrified and unhappy was not being shouted at or having jars thrown at him — it was that he knew how it felt to be humiliated in the middle of a circle of onlookers, knew exactly how Snape had felt as his father had taunted him, and that judging from what he had just seen, his father had been every bit as arrogant as Snape had always told him.